美術科教育学会通信 No.58

２００５年 12 月 20 日発行

通信事務　代表：〒 772-8502　鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地
鳴門教育大学芸術系（美術）講座　橋本泰幸研究室／ Tel. & Fax. 088-687-6481 ／ E-mail：hasimoto@naruto-u.ac.jp
企画・編集：山木朝彦／ Tel. & Fax. 088-687-6485 ／ E-mail：yamaki@naruto-u.ac.jp
編集レイアウト：山田芳明／ Tel. & Fax. 088-687-6636 ／ E-mail：yyamada@naruto-u.ac.jp
企画協力：山田一美（東京学芸大学）　WEB 版：谷口幹也（鳴門教育大学）

総務部と学会大会

美術科教育学会副代表理事
増田金吾（東京学芸大学）

橋本泰幸代表理事より副代表理事を命ぜられた増田です。担当のセクションは総務部で，役割は日本学術会議と学会大会の対応です。ここで，こうした役割等についてご説明し，併せて学会大会のあり方について若干述べたいと思います。

総務部は，代表理事のもと，会計や会員（名簿）管理等，地味ではありますが最も基本的な部分を担当しています。学会事務センターの破産により，学会事務がそれ以前の状態に戻ったわけですが，破産後の対応を経，その後そうした事務を含む諸活動をしています。こうした活動は，鳴門教育大学学会事務局に負うところ大ですが，同時に会員諸氏の協力なくしては成り立ちません。

日本学術会議については，本年 10 月 1 日から第 20 期の新体制に移行し，大きく様変わりしました。8 月に「日本学術会議第 19 期会員」名で佐藤学氏より「教育学関連学会連絡協議会の創設についての提案」という文書が届きました。従来の研究連絡委員会（研連組織）に代わる「教育学関連学会連絡協議会」への参加希望の有無についての問い合わせに，本学会は参加の意思を表示しました。一方，芸術学研連の方は，長田謙一理事に対応してもらっています。次に，学会大会について述べます。学会通信 No.57 で京都大会事務局代表の石川誠会員から第 1 次案内がありましたが，「第 28 回美術科教育学会京都大会」が平成 18 年 3 月 25 日（土）～ 27 日（月）に開催されます。京都での大会は 2 回目となりますが，その当時（平成 5 年）とは違い，今日では世の中の動きが目覚しく，社会・政治・教育等に一時も目をそらすことのできない時代となりました。

こうした時代にあって，通信 No.57 における「ここで，一度原点に帰るということを試みたい」という石川氏の言葉は，傾聴に値すると思います。世の動き，周りの動きが激しかったり，刺激的であったりすると，人はついそちらに目を向け，自己を見失ないがちになるからです。時代の流れに鈍感であってはなりませんし，現実直視の対応が求められることはもちろんですが，丁寧な考究を伴う研究や目の行き届いた教育こそが，今必要な時なのではないでしょうか。

最後に，会場校には，じっくりと研究発表や研究交流のできる環境設定をお願いすると共に，発表者諸氏には口頭発表内容の更なる充実を期待します。そして，会員諸氏の参加はもちろん，当日の多くの一般参加も期待し，質量共に充実した大会となることを念じております。

第 28 回美術科教育学会京都大会（第２次ご案内）

大会テーマ　変革の時代と美術教育

大会実行委員長　石川　誠（京都教育大学）

中教審の審議経過などについてお聞き及びと思いますが，学校における図画工作・美術科の位置は予断を許さない状況にあるようです。そうしたなかで本学会京都大会が開催されることになります。大会テーマは「変革の時代と美術教育」とし，去る 11 月 12 日（土）のプレ学会（第９回西地区研究会と併催）には，研究者，学校や各施設の教員，美術館学芸員等を交えた実践レベルからの熱心な討論が展開されました。前号で大会の趣旨や研究発表のお申し込みについてご案内し，本号では，主に大会の内容構成と参加申し込みについてご案内します。

学術研究や実践研究の交流の場としての学会大会をめざし，研究発表や研究部会によるコロキウムを中心に，学術講演では，近世絵画史で丸山応挙研究の第一人者である佐々木丞平氏（京都国立博物館長）から，「写生」の意味と美術教育についてご提言いただきます。一度，立ち止まって考えるきっかけにできればと願っています。

会場の京都教育大学は，京都駅をはじめ，どの方面からもアクセスのよい位置にありますので，どうぞお誘い合わせの上おいでください。なお，研究発表枠の割り当て等は３月初旬の最終案内でお知らせします。

■会　　期　　平成１８（2006）年３月２５日（土）～２７日（月）

■会　　場　　京都教育大学Ｆ棟（講義棟），大学会館（懇親会）

京都駅から JR 奈良線・各停３駅目（7 ～ 8 分）「JR 藤ノ森」下車＋徒歩３分。（行き先「京都市内」の乗車券で，そのまま「JR 藤ノ森」まで OK。）／京阪線「墨染め」下車＋徒歩７分。／近鉄京都線「丹波橋」で京阪線に乗換「墨染め」下車。

■大会テーマ　「変革の時代と美術教育」

■主な内容

１．研究発表

質疑・応答の時間にゆとりを持たせるように，発表枠の設定を試みます。また，会場で発表者と参会者との発表後の交流や情報交換ができるような工夫をします。

２．研究部会コロキウム

現在，各部会にお願いして鋭意企画を練っていただいています。気さくなフォーラム，若手がリードする研究発表会，学術討論会など各部会員と参会者の自由で闊達なコミュニケーションが展開されることを願っております。参会者の方は，関心のある部会にご参加ください。詳細は，最終案内でご紹介します。

３．学術講演

講師の佐々木丞平（じょうへい）氏は，今春，京都大学文学部教授から京都国立博物館長に就任されました。専門は，近世絵画史で丸山応挙研究の第一人者です。2004 年２～３月に江戸東京博物館で開催された特別展「丸山応挙―＜写生画＞創造への挑戦―」の監修者でもあり，「応挙は何を写そうとしたのか―」と，私たちに刺激的に問いかけてきます。そういえば，応挙の「写生」観と，いまの学習指導要領で言及する「スケッチ」などとは，いかなる関係にあるのでしょうか。果たして学力と

は・・・興味あるところです。

4．情報交換の場

会場にテーブルによる展示コーナーを設けます。会員の出版物や情報発信に，ご希望の方は１月末までに開催事務局にご相談ください。法人は，有料とさせていただきます。

■日　程

日程	第１日　３月２５日（土）		第２日　３月２６日（日）		第３日　３月２７日（月）
		9：30		9：30	
			研究発表②		研究発表④
		10：50		11：30	
	受付開始		部会コロキウム		学会総会
12：30		12：20		12：30	
			昼休み		
13：30		13：20			＊会場は，懇親会のみ学内の「大学会館」，ほかは,すべて「Ｆ棟（講義棟)」です。 ＊発表件数により，時程に多少の変動があることをお含みおきください。
	開会行事				
14：00			研究発表③		
	研究発表①	16：00			
			学術講演 京都国立博物館長 佐々木丞平氏		
16：00		17：10 18：00			
			懇親会		

参　加　申　し　込　み

■参加費

学会参加費：5,000 円　懇親会費：4,000 円／学生（院生含む）2,500 円

■申し込み方法

参加申し込み及び参加費・懇親会費の払い込みは，同封の「郵便振替払込書」でお願いします。必要事項（用紙が不足する場合は同内容）をご記入の上，下記大会事務局宛にお振込みください。

口座番号：00930 - 7 - 264296　　口座加入者名：美術科教育学会京都大会事務局

通信欄：学会参加費／ 5,000 円

懇親会費／ 4,000 円　　学割／ 2,500 円

■申し込み期限：3 月 15 日（水）

当日受付も行いますが , 大会運営上，できるだけ事前にお申し込みください。また，3 月 15 日以降は口座に振り込まず，当日，受付にてお支払いください。

＊宿泊等

事務局では扱いませんが，大学生協で紹介します。同封の別紙案内書をご覧ください。

＊問い合わせ

〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1 京都教育大学 美術科教育研究室内

第 28 回美術科教育学会京都大会事務局　TEL：075-644-8313（村田），075-644-8312(石川)

E-mail:tomurata@kyokyo-u.ac.jp（村田），mishik@kyokyo-u.ac.jp（石川）

報告

第２８回美術科教育学会京都大会プレ学会（２００５年度）
第９回西地区研究会 in 京都

日　時：2005 年 11 月 12 日（土）
会　場：京都教育大学
テーマ「変動期における美術教育–実践を基盤に–」

平成 17 年 11 月 12 日 (土) 京都教育大学で，「変動期における美術教育－実践を基盤に－」をテーマに，第２８回美術科教育学会プレ学会を開催した。第９回西地区研究会も合同開催であった。本大会のテーマ「変革の時代と美術教育」を受け，社会や教育の変動期に美術教育はいかにあるべきか，その導入段階としてプレ学会では，「日ごろの実践」から問題提起をしていただき，本大会につなげることがねらいであった。

開会にあたって，橋本泰幸代表理事からテーマに関わって，「変わりゆく時代，激動の時代に，美術教育の価値や意義がいかにあるかということを求めての研究会である」と参加者に方向性を説明された。また，「義務教育の構造改革」「変革の時代」「混迷の時代」「国際競争の時代」など今日的，緊急なキーワードに関わって，激動の時代において，何を変えるべきか，何を変えずにいるべきかを明確にすべき段階に至っていること，「美術力」「美術科教育力」を強固にすべき現状であることなどを見据えて，再考する機会にして欲しいとの考えが紹介された。

このプレ学会は，参加者総数５５名で，京都府教育委員会，京都市教育委員会，京都教育大学の後援を受けて開催した。小学校・中学校の先生方の参加もあり，「今後の美術科の行方」について，深刻化する実情を踏まえた討論がなされた。研究会の次第は表の通りである。

シンポジウムは，大きく２つの観点から行われた。前者は，今日の学校教育現場での改革や変革などの諸課題を明らかにするシンポジウム，後者は，大学や社会福祉施設など，さまざまな教育現場での改革や変革を明らかにするシンポジウムである。

13:00 ～ 13:30 ～ 13:35 ～	受付（京都教育大学、２号館Ｄ６講義室） 「ご挨拶」、橋本泰幸(美術科教育学会代表理事,鳴門教育大学) 「テーマおよび趣旨説明」、石川誠(第２８回美術科教育学会京都大会実行委員会,京都教育大学)
13:40 ～ 15:00	■　シンポジウム１〈美術教育と学校〉 *コーディネータ:「なぜ学校教育に美術教育が必要なのかー感性や想像力を育み、自己を確立する教科性をどう訴えればよいのかー」、福本謹一(兵庫教育大学) *シンポジスト ・「遊ぶ・学び合う、好きになる」、朝倉万貴(京都府城陽市立寺田南小学校) ・「子どもの「描きたくなる思い」に寄り添って」、増田幸子(京都市朱雀第一小学校) ・「「不登校という経験」を見つめ直し　心に新しい風を受けて・・・」、老松法光(京都市洛風中学校「不登校生徒学習支援特区,不登校生徒のための中学校」認定校)
15:10 ～ 16:30	■　シンポジウム２〈美術教育の現象〉 *コーディネータ:「子どもの感性と文化的成長を育む」、鈴木幹雄(神戸大学) *シンポジスト ・「土と内面の「流露」－知的障害児の社会福祉施設（一麦寮）の経験からー」、吉永太市(元一麦寮長) ・「美術に関わる学生の意識と教員養成プラグラム」、西村隆司(佛教大学) ・「大学教育は、何をすべきか？－図画工作・美術科教育における教師教育の現状と課題－」、宇田秀士(奈良教育大学)
16:30 ～ 17:00	■　総合討議　：上記２人のコーディネータと登壇者及びフロアー参会者を交えた討論
	「まとめのご挨拶」：花篤　實(美術科教育学会西地区統括理事,大阪芸術大学) 全体進行:村田利裕

シンポジウム１では，コーディネータの福本謹一氏から，次期の教育課程の改訂に向けて，美術も音楽も周辺部に追いやられるという実情があり，「どういった位置付けを担ってきたのか。創造性という言葉が使われてきたが，それが美術教育のものではなかった。」と現状分析がなされ，この学会としても，美術教育全体としても，図画工作・美術の先生方と共に「何らかのアクションの時代」ということも考えていかなければいけない等の分析が示された。

朝倉万貴氏は，小学校１年生の「砂遊び」に熱中する姿が報告された。「大きな穴を掘っていく」が氏の注目した視点であった。増田幸子氏は，現在の子どもが，図画工作を心待ちにしていること，基本となるクラス指導に連動して，体験や自己流で「構成画」とよんでいるイメージをつかった絵の描き方に適性があり，図画工作が重要な教科であることが指摘された。老松法光氏からは，日本でも数少ない取り組みである不登校生徒学習支援特区（京都市洛風中学校）の創設に関わる事例を発表された。なお「創造工房」という教科名称になっており，教科体制面での話題提供となった。

シンポジウム２では，コーディネータの鈴木幹雄氏から，ご自身のワークショップの事例を示されながら，教育は，芸術大学出身者のもつ美術の多元性・フレキシビリティに学んでいく必要があるが，芸術家が実際に指導するとオールドファッションの場合もあり，難しい問題である。エルンスト・レッドガーの空間の構築性に関する観点などを学んでみる必要があるのではないか，などの話題提供がなされた。吉永太市氏は，知的障害児教育の黎明期の実践体験から，「土」との接触が，心理的な不安定を改善し，寮生の自発性が発現することを報告された。西村隆司氏は，大学の授業を変えていく必要性を訴えられた。小学校に入り込んで行うプロジェクトなど，京都・大阪の教育現場に関わった，大学の授業変革の事例が紹介された。宇田秀士氏は，大学教育と現場教育との乖離があり，大学教育には新たな課題があると提起された。また，「総合の視野をもった専門教育の文節化」が必要で，教科専門の先生に「造形遊び」「鑑賞」等の指導をいただく必要がある等の指摘があった。また，全体としては，大学教育の閉鎖性を打開するため授業公開をしていく必要がある等の提言をいただいた。詳細については，次の冊子をご覧いただければ幸いである。

（文責：京都教育大学　村田利裕）

・第２８回美術科教育学会京都大会実行委員会　2005 年 11 月 12 日発行　『変動期における美術教育－実践を基盤に－』，第２８回美術科教育学会京都大会プレ学会概要集

あんない 第 11 回東地区研究会

テーマ「今，始まるアートライティングの教育」

2006 年 1 月 28 日 (土) 午後 1:00 ～ 5：00
つくば国際会議場　(つくばエクスプレス終点つくば駅下車)

開催趣旨：　アートについて言葉で表現する過程で、アートへの参加体験を意味付け、振り返り、共有することができる。アートライティングの教育は、知を避けて感覚のみで作ることに傾きがちな美術教育から脱却し、表現、鑑賞、アートと生き方についての気づきを学習者が自分のものとしていく過程を支援し、未来の主体的な文化環境形成者を育てることにつながるのではないか。この研究会では、未だ数少ない「アートについて書く」ことに 焦点を当てた教育活動の試みを集め、その課題と可能性を問う。

第一部　第 1 回高校生のためのアートライター大賞授賞式
「アートライター大賞」は高校生が自分のアート体験をもとに書く小論文の全国コンテスト。171 編の応募作品の中から選ばれた大賞作品等を高校生自身がプレゼンテーションする。

第二部　特別講演
語りえぬもののために—アートライティングの先人たち
今橋映子　東京大学大学院総合文化研究科助教授・第 1 回アートライター大賞選考委員

第三部　アートライティングの教育実践報告
・筑波大学所蔵作品を用いたアートゲームによる言葉の広がり
　皆川ひろ子　結城市立絹川小学校教諭
・アートって何？—マイ アート ギャラリーの実践から
　水野谷憲郎　東京学芸大学附属小金井中学校教諭
・中等教育における芸術学の教育 : 総合学習「ゼミナール」の実践から
　土井宏之　筑波大学附属駒場中・高等学校教諭
・美術専門コースにおける「美術概論」の実践
　吉岡 隆　北海道札幌平岸高等学校教諭
・「対話」を通して「見る」という行為を考える
　佐藤朋子　岡山県総社南高等学校常勤講師
・パブリックアート・地域文化研究、そしてアートライティングの可能性
　松尾豊　富山県高岡第一高等学校教諭
総括コメント　宮脇理　美術科教育学会理事・元筑波大学教授

第四部　懇親会

主催：　第一部・第二部…筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻
　　第三部・第四部…美術科教育学会共催

問い合わせ・参加申し込み：　筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻　直江俊雄
Tel/Fax 029-853-2821(研究室)　naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp

研究紹介

広島高等師範学校附属小学校の図画教育研究

佐々有生（島根大学）

写真１　大竹拙三 (昭６年頃)

筆者は，わが国の美術教育史を研究テーマの一つにしています。その取組みは，大学院での修士論文作成までさかのぼります。当時，筆者は広島大学附属小学校に勤務していました。現職教員の院生だったことから，修論執筆に当たって，最初は，自らの教育現場での教育実践・経験等を理論的に検証・考察し，授業論としてまとめたいと考えていました。また，そうすることが自然だと考えていたのです。ところが，ある時，指導教官からテーマ設定の指導で「むしろ現場から離れて，全く別の視点から美術教育を考えるのも意義があるのではないか」と問いかけられました。そのことをきっかけとして，最終的には勤務校における戦前の図画教育実践史をまとめることにしたのです。

勤務校だった広島大附小は，明治 38(1905) 年に広島高等師範学校附属小学校として創設されました。同校は，大正 3(1914) 年に月刊誌『学校教育』を創刊します。それは，戦時下で一時中断をみますが，現在なお発刊し続けられています。また，本誌は復刻されており，基本的に本誌を繙くことにより，広島高師附小時代の図画教育実践を一定程度は明らかにできると考えたからです。さらに本研究の大きな後押しとなったのが，関係資料の調査中に，幸いにも被爆を免れた広島大学学校教育学部の図書館３階にある未整理で埃まみれの文献・資料等から『各科教授細目』(広島高等師範学校附属小学校，大正２年) を見出したことです。明治 38(1905) 年に開校した広島高師附小は，明治期が学校体制確立の過渡期に該当します。大正 2(1913) 年刊行の『各科教授細目』は,『学校教育』の創刊前であり，同校創立期の教科課程を知るうえで貴重な文献でした。このことにより，同校の開校当初からの図画教育史を明らかにできると意を強くし，広島高師附小の図画教育について通史的に明らかにすることにしたのです。

ところで，美術教育に関する歴史研究は，一般的に制度・思想・教員養成に関するものに比べて，実践に深く関わった実際的な研究は少ないのではないでしょうか。中でも，地方の美術教育に関わる実践史の掘り起こす余地は，まだ多くあると考えます。被爆地広島においても同様で，戦後はまだしも戦前の美術教育の実践が明らかにされているものはほとんど見あたりません。昭和 20(1945) 年８月６日, 広島の街は焼土と化し, 広島高師附小も壊滅しました。現在, 同校に関する貴重な文献・資料のほとんどが散逸しており，旧教官等からの寄贈本等に頼っているのが現状です。

したがって，同校図画教育の史的研究は,『学校教育』を基本文献にして，それに関する文献検索・収集・整理等から始めなければなりませんでした。とりあえず，院生１年目は，戦前の同校図画科及び手工科の教育にかかわる文献等のあらゆるものを収集・整理することにしました。しかし，修論では，広島高師附小創立期から大正 10(1921) 年までの図画教育という非常に限られたまとめになってしまいました。以後十数年間，微力ながら今日まで継続研究し

てきています。ちなみに，これまでの研究概要については，次のとおりです。

広島高師附小の図画教育は，主に吉田俊造，堀孝雄，大竹拙三によって行われました。吉田が広島高師附小の創立期の訓導でした。創立期に当たる明治後期から大正前期の同校図画教育は，国定教科書『新定画帖』を中心にして図画教授がなされました。吉田は，同校創立期の訓導として『各科教授細目』(大正２年)における「図画科教授細目」を編纂します。その「図画科教授細目」は，『新定画帖』に基づいて編纂されており，その具体的な実践をすすめたのは，大正 4(1915) 年９月に赴任した堀です。堀は，「透視図法」等の理解・習得のための教具の開発研究を行います。やがて堀は，山本鼎の自由画教育運動の洗礼を受け，『新定画帖』のもとでの「科学的正確」から「主観的芸術的正確」へと目的の質的転換をみせるようになります。そして，広島高師附小図画教育は，堀から大竹へとバトンが手渡され，新たな図画教育が展開されることになります。

大竹は，大正 10(1921) 年６月，新潟県長岡女子師範附小から広島高師附小訓導として赴任します。以後，大竹は昭和 16(1941) 年３月までの 19 年 10 ヶ月もの長い間，同校の図画・手工教育に携わることになります。この３名の訓導の中では，最も長く同校に勤務し，数多くの著書を著します。その代表的な著書が『形象図画教育の新機構』(昭和８年)です。

写真２　写生指導中の大竹（昭和 10 年頃）

大竹は，赴任当初，「自由画教育」提唱を受けて基本的には肯定の立場を取ります。しかし,「放任」などと批判を浴びた「自由画教育」以後の図画教育として，昭和 8(1933) 年に「形象図画」とする独自の図画教育を確立していきます。大竹は，自由画以前の図画教育を「形式(技巧)」尊重，自由画教育を「内容(美的感情)」尊重としてとらえました。そして，「形式」と「内容」を融合する「形象図画教育」を唱えるのです。そして，「国民学校令」(昭和 16 年)の芸能科図画の「要旨」や「内容」で，初等教育では初めて「形象」の表記をみることにつながります。こうした制度上の表記により，大竹の主張する「形象図画教育」の理念等は広く認知されたと考えられます。

しかし，大竹は，昭和 16(1941) 年４月の「国民学校制」実施を目前にして長年勤務した広島高師附小を退職し，満州国に出向します。そして，大竹は満州で終戦を迎え，戦後，わが国は新教育を建設することとなります。

以上が，広島高師附小３名の訓導の実践の概要です。現在は，附属国民学校時代の図画教育についての考察をすすめているところです。できれば，広島高師附小の創立から附属国民学校時代まで，大竹の「形象図画教育」を中核にしながら同校図画教育実践史としてまとめたいと考えています。また，調査研究の過程で，「想画」の実践者である青木實三郎と大竹の結びつきが明らかになりました。青木の実践は，現勤務地の貴重な図画教育実践であり，今だ多くの貴重な資料が残っていることも分かりました。今後とも，広島高師附小の図画教育研究を基軸にしながら，さらに縦横に広がる実践史として調査研究を深めていき，ささやかながら，わが国図画教育実践史の捉えなおし，不明点の補完，肉づけ等の一助になればと願っています。

The Journal of Aesthetic Education の日本人研究者の論文解題

(Vol.37, No. 4, Winter 2003: University of Illinois Press,ISSN:0021-8510)

井上由佳 （国立歴史民俗博物館・立正大学文学部〔非常勤講師〕）

＊＊＊

The Journal of Aesthetic Education, 第 37 巻 4 号 (2003) は特集号となっており，テーマは「今日の日本における美的教育 (Aesthetic Education)」である。この特集号の狙いは，読者に今日の日本における芸術・美的教育 (art and aesthetic education) への理解を深めてもらうことである。さらには，日本の芸術・美的教育が他の文化とどのように影響を与え合ってきたかについて，理解を深めてもらうことも狙いとしている。17 人もの日本人研究者が寄稿しており，論文の内容も歴史的な考察や，理論的な考察，異文化間での影響を調べた比較文化的研究，実践に関する研究等，広い範囲に渡っている。本稿では紙幅の都合上，三つの論文に焦点を絞ってそれぞれの内容を紹介した上で，コメントを付すことにしたい。

まず最初に取り上げるのは，岡崎昭夫「アーサー・ウェズリー・ダウの京都講演 (1903 年)」である。本論文ではまず，日本の伝統的美術に影響を受けたまれな例として，米国の芸術家兼美術教育であるダウの主な経歴を紹介している。その上で，英語で十分に紹介されてこなかったダウの京都講演を，ダウの伝記や日本の新聞記事等から再構成している。

京都公演でダウは，西洋の美術教育ではものを外から観察し，それを忠実に写し取ることを訓練してきたが，この方法では自由に自己表現はできないと指摘しているという。そして，日本美術の巨匠の作品から学んだ形や色彩といった基本に着目し，例えば米国の小学校の美術の授業で，墨や筆，和紙を使うことを推奨しているという。さらには，色彩について学ぶために日本の木版画を用いるべきだと主張しているという。また，自然破壊が進む現状に警鐘を鳴らし，工業製品の氾濫を嘆き，手作りの工芸品の持つ意味を問い直すことを提言している。そして最後に，外国の文化に目を奪われるあまり自国の文化をなおざりにする傾向が日本にも見られることを指摘し，日本美術の特徴と伝統を受け継いで欲しいと述べたという。こうしたダウの発言から岡崎氏は，ダウの存在は美術が異文化間理解に通ずることを明らかにしており，異文化間で相互に学び合うことが今後の美術教育の発展および研究に不可欠であると述べている。

次に取り上げるのは，直江俊雄「日本と英国の中学校における美術教育」である。この論文はまず，日英の美術教育を概観している。日英のナショナル・カリキュラムの歴史を簡単に述べた上で，日英の文化的背景に言及している。すなわち，英国で多文化社会の現実を反映した考えを取り入れようと努力しているのに対して，日本の教科書は西洋の芸術作品を多く載せていることを指摘している。また，日本の学習指導要領が西洋と日本のみならず，アジアの文化について学ぶように定めていることも指摘している。さらには，英国の研究者が日本の教室を訪問した際の印象と，日本の研究者が英国の教室を訪問した際の印象も紹介している。

直江氏は日本の美術科教員への質問紙調査から，日本の中学校では，実際に描画に割かれている時間が教科書指導計画案よりも短い一方で，デザイン・工芸に割く時間が長いという実態を明らかにしている。教員は描画の指導に熱心であるが，その教え方が難しいと感じているという。また，生徒の描画に関心を持たない生徒が，46.2% にものぼることを指摘している。デ

ザインと工芸により多くの時間が割かれている理由の一つとして，描画のような個人作業よりも生徒と先生のコミュニケーションを取りやすく，学級運営をし易いことをあげている。また，英国の中等学校美術科に対する質問紙調査から，ナショナル・カリキュラムの導入が及ぼしている影響を明らかにしている。さらに，日英の工芸教育に関する比較調査から，日本が日本固有の工芸品を重視しているのに対し，英国はグローバルな要素を重視していることを明らかにしている。また，日本は専門辞典や教科書などを除くと，英国に比べ使用しているリソースがかなり限られていることも指摘している。

最後に，藤江充「アーティスティック・プレイと造形遊びの比較考察」を取り上げよう。この論文は日米における造形遊びの意味を比較考察したものである。

藤江氏はまず，日本の小学校学習指導要領における造形遊び（楽しい造形活動）の位置づけを行っている。その上で，日本の造形遊びの特徴として，以下の点を挙げている。すなわち，従来の彫刻，描画といった枠組みを取り払い，身近な自然物や人工の材料などを使って自由に表現すること。教室以外の空間に赴き，総合的な知性を生かす活動であること。そして，創作の結果，何が完成したのかよりも，その過程を重視すること等を挙げている。

藤江氏は次に，エリザ・ピトゥリの研究に基づき，日本と比較しつつ，米国の造形遊びの特質を明らかにしている。すなわち，米国の造形遊びは，子どもに理由付け，仮説の検証，問題解決といった能力を習得させることを目標としているという。他方，日本の造形遊びは，環境との相互作用を通して，子ども自身が想像力豊かな世界を表現できるよう促すことを目指しているという。また米国では造形遊びを行う場所は屋内が中心であり，取り上げる材料も人工物が中心であるという。子ども観については，日米で特に違いはないとしている。最後に，ピトゥリは造形遊びをどのように評価するかについてなんら言及していないことを指摘した上で，日本で小学校教員が造形遊びを評価する難しさに言及している。

以上，三つの論文を紹介してきた。三つの論文はいずれも，貴重な資料や最新の調査結果に基づく興味深い論点を提供しており，英語圏の多くの読者にとって興味深い内容となっている。

日本の美術教育を国際的な視野から研究し，諸外国の研究者と交流していく上で，本書はきわめて重要な足がかりとなりえる。日本の美術教育を海外に紹介したり，他の国の実践と比較したり，相互の影響関係を明らかにしたりする場合，単に学習指導要領や外国のナショナル・カリキュラムの文面を分析するだけでは，実態を深いレベルで理解することは難しい。この点において，直江氏が行っているように，実証的な質問紙調査のデータに基づいて議論を行うことは，きわめて有効な手段である。また，藤江氏のように，具体的な一つの活動事例に焦点を絞って，比較考察を行うことは，異なる文化における美術教育について相互理解を深める上で有効であろう。さらには，岡崎氏のように，美術教育の歴史的背景に踏み込み，歴史の過程に見られる諸外国からの日本への影響と，日本が外に与えた影響を検証することにより，より深い洞察を得ることができる。

本稿では取り上げることはできなかったが，中村一世，増田金吾，金田卓也，日野陽子，岡本康明，福本謹一，永守基樹，山田一美，本村健太，石崎和宏，王文純，岡田匡史，金子宜正，岩野雅子，各氏の論文はいずれも日本の美術教育研究 最前線を世界に伝える点で意義のある業績である。今後，本書が足掛かりとなって，美術教育の分野での国際交流が活発に行われていくことを期待したい。

文献解題　学術文献の紹介と解説　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今井康雄「子どもの美的経験の意味」

佐藤学・今井康雄 編『子どもたちの想像力を育む　アート教育の思想と実践』（東京大学出版会，2003）所収

ISBN:4-13-056207-X

有田洋子（鳴門教育大学大学院）

＊＊

本論文は，美的経験における「反省」という要因を掘り下げることによって，美的経験のサイクルを明らかにし，情操教育的な主張に偏っている現在の美術教育論を美的経験の半分でしかないと指摘する。そして，作品を軸とする残り半分の部分の美的経験も意識する必要を述べる。次いで，このサイクルは自己への反省的関わりが自己の変換でもあるような回路も組み込んでいる。それゆえ制作・受容される作品は世代が適切に「すれ違う」ためのメディアであると詩的に結論づけている。論文の目次構成は以下の通りである。

1.「子ども」と「美的経験」の困難な関係／ 2.「美的経験」の輪郭／ 3. 子どもの美的経験／ 4. 美的経験と人間形成

序論的な１．の後に展開される今井の考察を順に見ていく。

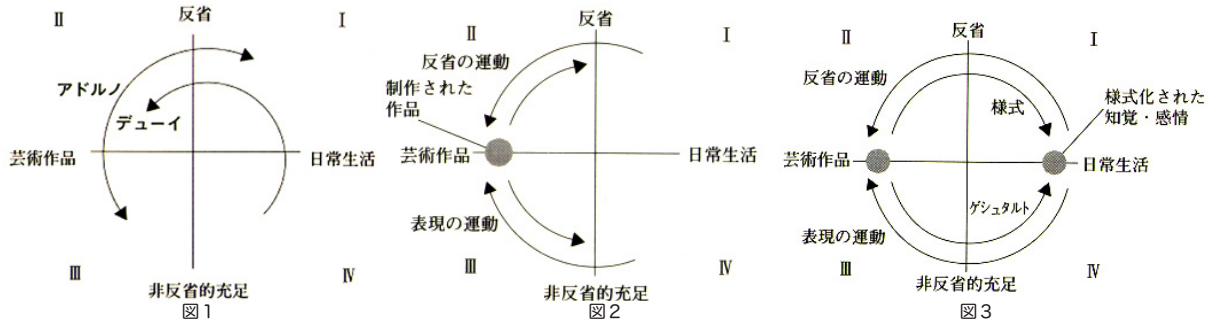
2. で，美的経験について対照的な議論を展開したデューイとアドルノの理論を参照して，美的経験の輪郭が提示される。今井は美的経験の領域を〈芸術作品 - 日常生活〉と〈反省 - 非反省的充足〉という二つの軸によって構成されているものとする (図 1)。デューイは，日常生活において非反省的に経験されている美的な質からの，連続的発展として美的経験の成立をみる。日常生活における〈非反省的充足〉（IV 象限）を出発点として,〈芸術作品〉と〈反省〉（II 象限）へと向かう。デューイは，〈芸術作品〉を特権化しない。それに対してアドルノは，日常生活から隔絶した自律的な〈芸術作品〉との反省的関係を徹底することによって〈非反省的充足〉へ至る。つまり，〈非反省的充足〉はデューイにおいて出発点，アドルノにおいて到達点である。それは前者において主客の「相互浸透」，後者において「ミメーシス」という，主格未分の非二元論的な経験の観念である。

3. で，子どもの美的経験が，発達心理学，芸術療法，芸術教育の三領域での研究に即して検討される。子どもの美的経験の解明としては，それぞれ不十分であることが指摘される。評者にとっては当然ながら芸術教育についての記述が興味深い。今井は，学習指導要領をはじめとして現在の芸術教育の多くの主張は，目的である人間形成を情操教育に限定し，人間形成へと至らせる造形活動を楽しい・感動といった体験に限定しているとする。「味わう」「気付く」という用語で象徴される自己との反省関係はあるが，それらも楽しいことをして楽しいことに気付くというような，同語反復的な自己関係に帰着する。これでは〈反省〉と〈充足〉,〈芸術作品〉と〈日常生活〉が混然一体となった状態となり，美的経験は充足体験へ解消し，芸術教育は美的経験を情操の枠に押し込むという，感情の強制に帰着してしまう。論文の最終節で指摘されるが，情操教育は美的経験のサイクルの右半分で済ます試みである。

4. で，モレンハウアーの実験及び研究を材料にして，子どもの美的経験における〈反省〉の意味について仮説的な見通しが示される。まず,「4.1 ミメーシスと表現」で, 手本の絵に従って「何かしらぴったりくるもの」を描かせるという実験で，モレンハウアーが「内面的世界の出来事に対するミメーシス的関わり」と呼ぶ作品に注目する。それは手本の特性に直接向かわず,「内面的世界の出来事」を表現しているように見える。モレンハウアーはこの表現の背後の内的世界に「衝動」「気分」を挙げる。今井はそれらはそのまま絵の形に表出されるもので

はなく，ミメーシスに伴う〈反省〉の運動によって表現となり，そして〈芸術作品〉は制作・受容において〈反省〉の運動と内面的世界の模倣という表現の運動の合流点にあると指摘する(図２)。

次の「4.2 ゲシュタルトと様式」で今井は，美的経験での自己への〈反省〉の運動が同時に自己の変換でもあるような転位の回路を内蔵していると言う。〈反省〉の運動は表現の運動を誘い出し,〈反省〉はその誘い出された表現の中に新しい自己を見出す。今井はモレンハウアーを参照して，様々な運動を〈ゲシュタルト〉と〈様式〉に整理する。〈ゲシュタルト〉は，子どもの表現を最初から規定する原理であり,「図と地」「水平と垂直」といったような選別可能で単純な二者択一の形をなす。〈様式〉は,「慣習的, 文化的な伝達」「一般的で伝達可能な形式」である。美的経験は世界との接面を身体のレベルにまで下りて探索する (ゲシュタルト) と同時に，そうした世界との接触の経験を伝達可能な形 (様式) にする。こうして，日常的な知覚や感情の, 文化に即した様式化が可能になる。表現を非反省的レベルで支える〈ゲシュタルト〉と，表現の反省的コントロールを要求する〈様式〉の合流点に，様式化された知覚・感情を想定することができる (図３)。作品は〈反省〉と表現の運動を誘い出し，それが様式化の誘い水ともなる。



論文末尾の「4.3 美的経験における世代関係—まとめにかえて」で，今井は美的経験のサイクルはどこが欠けてもならないことを指摘する。知覚と感情の様式化は，サイクルの右半分で完結するのではない。また，冒頭に記したように情操教育はまさにこの右半分のサイクルのみで済まそうとする試みである。左半分のサイクルである，作品を経由することで，子ども自身が考えもしなかったような自己を作り出す機会も子どもに与えると言う。右半分で様式化された知覚・感情を子どもの側に沈殿させつつ，左半分では思いがけぬ自己へと変換する可能性を不断に子どもに提供する。いずれにとっても，大人の側が子どもに提案し，場合によっては押しつける文化的規範は必要条件となる。大人の側の試みは，美的経験のサイクルに組み込まれることによって，知覚と感情の様式化という形で成就すると同時に子どもの自己の思いがけぬ出現という形で絶えず裏切られもする。つまり，大人と子どもは，すれ違いながら，メッセージを送りあっている。そこから評者には子どもの人間形成だけでなく，子どもの作品を見たり指導したりすることは大人の人間形成にもなると読み取れる。

評者にとって本論文の最大の教示は，美的経験の全体が〈反省〉と〈非反省的充足〉,〈芸術作品〉と〈日常生活〉という四点をめぐるサイクルという明確な図式で示されたことであった。情操教育の主張が〈日常生活〉を経由するサイクルの右半分に偏っているとの指摘は，情操教育でない左半分，つまり〈芸術作品〉を経由する教育の必要を示している。さらに評者は，美術教育の現状は美的経験のサイクルの〈非反省的充足〉を経由する下半分に偏っているので,〈反省〉を経由する上半分をもっと強調すべきであるという捉え方もできると考える。

案内（速報）

この度，美術科教育学会事業部は，日本学校音楽教育実践学会と共催で，下記のシンポジウムを企画しました。趣旨については以下の通りです。

シンポジウム趣旨

最近，我が国においてもこれまで想像もできなかったような重大な青少年の事件か多発しています。反社会的な行動や突発的な攻撃（いわゆる「切れる」言動）や引きこもりなど，青少年の問題行動が毎日のように報道され，社会的な問題になっています。また，子ども達のなかには，自分の感情的な心の動きを見つめたり，それを言葉で相手に伝えたりすることが苦手な者もいます。これらの問題行動や能力は，教育の観点からは子ども達の認知・感性・感情などの能力の問題として取り上げられています。今，子ども達の教育の中で，この認知・感性・感情などの，いわゆる「心の教育」にどう向き合ったらいいのかが問われています。

そうした中において，新聞などの報道によると，中央教育審議会の専門委員会では，学校の教育課程の中で音楽や美術の芸術教科の時間数は縮減あるいは選択にしてもよいという意見が出されているという話です。音楽や美術の活動は，感性と想像力を働かせて表現したり鑑賞したりすることによって子どもの心を培う教科なのです。子ども達の「心の教育」が社会的な問題としてクローズアップされてきた時代に，受験教科の時間を増やし芸術教科の時間を縮減するということは，時代を逆行していると言えます。そこで，私達は，「感性と心」の教育に寄与する芸術（音楽・美術）教科の役割とその方法を改めて問い直し，学校教育における芸術教科の在り方を考えてみることとしました。

シンポジウムでは，このような子ども達の「感性と心」の教育の問題に，まず内田伸子先生に認知心理学・発達心理学の立場から基調講演を，次にパネルディスカッションとして「感性と心」の教育に視点を置いた音楽と美術の授業実践の発表を，そしてそれについての教科教育学研究の立場からの理論的整理，最後にこれらの発表をテーマの趣旨に即して脳科学研究の立場から総括的に整理するという方法によって展開します。

会員の皆様のご来場をお待ちしております。

芸術（音楽と美術）教科に関する緊急シンポジウム

感性と心の教育に寄与する芸術（音楽・美術）教科の役割と方法を問い直す

日　時：平成 18 年 1 月 8 日（日）13 時 00 分～ 17 時 00 分（12 時 00 分受付開始）
場　所：国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議場（東京代々木）03-3467-7201
参加費：500 円
主　催：日本学校音楽教育実践学会、美術科教育学会
事務局（問い合わせ先）：
奈良教育大学（音楽教育研究室）　宮下俊也　0742-27-9214（miyashit@nara-edu.ac.jp)
鳴門教育大学（美術教育研究室）　谷口幹也　088-687-6494（t.mikiya@naruto-u.ac.jp）

◆基調講演　演題「創造的想像力を育む―すばらしい教師との出会い―」
講師　内田伸子氏（お茶の水女子大学副学長）

◆パネルディスカッション
授業実践の立場から　音楽　斉藤百合子（大阪教育大学附属平野小学校講師）
美術　郡司明子（お茶の水女子大学附属小学校教諭）
教科教育の立場から　音楽　小島律子（大阪育大学教授）
美術　新井哲夫（群馬大学教育学部教授）
脳科学の立場から　小泉英明（株式会社日立製作所役員待遇フェロー）
コーディネーター　橋本泰幸（鳴門教育大学教授）西園芳信（鳴門教育大学教授）

事務局より

◆公費による支払いについて

近年，学会年会費や学会誌掲載料を公費で支払をされる学会員が増えております。公費による支払いを希望される方は，必ず，**事前に事務局までご連絡の上，必要書類を各自で作成して事務局担当者宛に送付**してください。学会事務が繁雑になっておりますのでご協力をお願い致します。

◆新入会員の紹介

河村章代（高知県立美術館）, 小菅生野（姫路市立美術館）, 林 亨（浅井学園短期大学部）, 塩見考次（京都市立桃山南小学校）和田咲子（大塚国際美術館）近藤 亘 ,（広島大学附属中・高等学校）, 山川真樹（京都教育大学大学院）, 竹内晋平（京都市立鷹嶺小学校），【平成 17 年 12 月 7 日までに手続き完了】